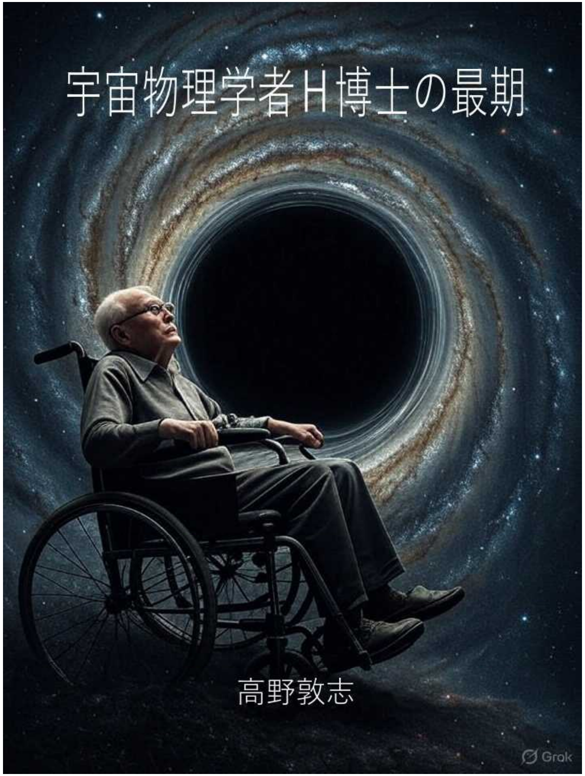

目次

宇宙物理学者H博士の最期　1
あとがき　34

宇宙物理学者Ｈ博士の最期（さいご）

暖かい春の日差しが、水面に無数の光を反射している。ボート部の男子部員らが、掛け声をかけて競技用の艇（てい）を漕（こ）いでいる。キャンパス近くの川辺で、大学院生のＨはガールフレンドのジョアンナと、肩を並べて座っていた。こうしていると、以前と何も変わらないようだが、オールをとるどころか、杖をつかなければ立ち上がれない。運動神経細胞が麻痺する難病で、余命２年と宣告を受けていたからだ。

「光速で進むボートに乗っていれば、時間が止まってしまうんだよ」

突拍子もないことをＨが言っても、ジョアンナはほほ笑むば

かりだった。相手に対する一途（いちず）な思いが、瞳の奥からのぞいている。宇宙研究を始めたばかりで、命が尽きてしまうはずの自分を、彼女は大きな愛で包み込んでくれる。「あなたが神に召される日まで、生活を共にしたい」というのだ。Ｈ自身も逃げ出したいのに、死に向かい合う勇気を、彼女はどこから得ているのか。このまま一緒にいられたら、何と幸せなことだろう！

キャンパスの時計台から四時を知らせる鐘が、物憂い響きで伝わってきた。刻一刻と時を刻む機械が忌まわしくてならない。Ｈはジョアンナを抱き寄せようとした。しかし、手がうまく動かない。いったいどうしたんだろう。目を開くと、車椅子に腰かけたまま、うたた寝していたのが分かった。肘掛け（ひじかけ）に乗った腕は皺（しわ）だらけで、生えている毛も真っ白になっていた。

若返ったのは夢の中だけだったのか。H博士はため息をつくと、コーヒーを入れている後ろ姿に向かって、アイカメラに接続された合成音声で呼びかけた。気管切開手術を受けて以来、肉声を発することもできなくなっていた。

「君はいつまで経っても若いままだ」

カップを手にした女が振り返った。柔らかなまなざしと物言いたげな唇、確かに若い頃のジョアンナそのものと言っていい。

「あらやだ。パパはまた私のことママと間違えたのね」

立っていたのは娘のローラだった。彼女は息で冷ましながら、コーヒーを少しずつ飲ませてくれた。自分にとっては、ジョアンナも娘のローラも同じように愛らしい。半分ほど飲んだところで、H博士は娘にキスがしたくなった。わずかに動く口をと

がらせると、ローラは困ったような顔を見せて笑った。

「私はママじゃないのよ。ママはもうパパの奥さんじゃないんだから」

そうだった。余命2年と宣告されながらも、ジョアンナの愛情に支えられて、一般相対性理論と量子力学を統合した理論で、宇宙を説明する方程式を発見しようとしていた。しかし、自分で声を出すこともできなくなり、全身の麻痺が進んだことで、これ以上妻の自由を縛りたくないとして、H博士の方から離婚を申し出たのだった。

第二の人生を送ってもらいたくて別れたわけだが、いまだにジョアンナの面影を追い続けている。母親と間違われる娘もいい迷惑だろう。体の機能が衰えていくのに対して、頭はますま

す冴え渡っていったのだが。
　窓ぎわの鳥籠では、カナリアが美しい声で鳴き出した。今日は何て素晴らしい日なんだろう。七十半ばまで生きられたなんて、自分でも信じられない。小鳥までが長命を寿いでくれているのか。声のする方を見ようと思ったのだが、指が全く動かない。目を向けようとしても、視界がぼやけてしまい、焦点が合わせられない。どこを見ているかによって、コンピューターで合成音声を発していたのに。それにひどい頭痛が……。
「パパ、パパ、どうしたの！」
　ローラが駆け寄ってきた。Ｈ博士は体を揺すられるのを感じた。異変に気づいた娘は、病院に電話をかけたのだが通じず、医師を呼びにドアの外に出ていった。冷たい早春の風が入って

きた。
　そのとき、Ｈ博士の大脳の中では、血栓ができた血管から出血が始まっていた。こうした異常事態の中でも、冷静さを失うまいとしていたが、意識が混濁してくると、自分が肉体の中にいるのか、外に抜け出してしまったのか分からなくなった。車椅子に腰かけながら、自身の姿が目の前に見えたりした。頭から離れないのは、元妻のジョアンナが早く会いに来てくれないかということだった。
　柱時計が鳴った。Ｈ博士は数をカウントしていた。十、十一、十二、十三、午後一時か。そのとき、ドアが開く音もしないのに、誰かが部屋に入ってきた。頭に白い頭巾をかぶり、白い衣の上に青いガウンを羽織っている。左腕には産まれて間もない

赤ちゃんを抱いている。
聖母マリアかと思ったが、よく顔を見ると元妻のジョアンナである。コスプレでもしているのだろうか。赤ちゃんははだけた胸に唇をつけると、おっぱいを吸いはじめた。それと同時に、H博士の口の中にも、甘くて温かい母乳が流れてきた。見ている自分と、乳首に吸いついている自分に、引き裂かれてしまったようだった。きゅっと唇で押すと、愛が口いっぱいに広がってきた。何てことだ！　自分はジョアンナを、母のように慕ってきたのか。

その頃、H博士の脳内では、流れ出た血液が頭蓋骨(ずがいこつ)の内側に広がり、左右の脳を圧迫しはじめていた。あふれた血液は小脳から間脳まで伝っていった。エンドルフィンの分泌(ぶんぴつ)が始まると、

目の前に星空の幻影が広がった。あれは天の川なのだろう。真っ黒な夜空に浮かぶ星は、白くておいしいせせらぎとなり、銀河の中心に向かって流れていく。

人は生まれたとき、母に抱かれて至福の時を過ごす。そして、最後は母胎に戻るようにして、命尽きてしまうんだろう。これはもしかして、死が訪れようとしているのか？　だとしたら、コンピューターの電源が落ちるように、意識も闇に飲み込まれて、自分が存在したということすら、もうすぐ意味がなくなるのだ！

身震いした瞬間、部屋の中に連れ戻されていた。ジョアンナに抱かれた赤ちゃんが、こちらをにらみつけている。生意気な顔をしていると思った途端、禅僧のような喝(かつ)を入れられた。

「何を怯（おび）えている！　宇宙には始まりがある。ビッグバンとともに、時間が始まったのだ。それ以前には時間がない。世界を創造した神は、存在しなかったのだ。方程式のみが宇宙の生成を証明する。それを手にした者は、神に等しい存在になるのだ！」

　聖母姿のジョアンナは、赤ちゃん姿のHをあやしながら、髪をなでると唇に熱いキスをしてきた。舌の柔らかな感触が口に広がった。ああ、彼女は世界を生んだ大いなる母だ。自分は愛されているのだ。ジョアンナの唇が離れると、H博士は白い頭巾の背後から、光が八方に広がっているのに気づいた。

「世界を創造なさったのは神さまよ。あなたは不自由な体を授（さず）かったので、神さまを恨んでいるんでしょ。だから『聖書』を

否定して、自分が神に成り代わりたかっただけよ。私が聖母マリアなら、自分はキリストだと思っているのね」

　鳥籠のカナリアが、心地よさそうに天使の歌をうたっている。すでにH博士は、ベッドの上に寝かされていた。下顎（かがく）呼吸が始まっており、顎（あご）を上下に動かし、口をパクパクさせて、吸えない空気を吸おうとしている。

「父を、父を助けることはできないんですか。点滴でも何でも、少しでも楽にさせてあげたいんです」

　医師はうなだれると、首を左右に振った。

「点滴をすると吐いてしまったりして、かえって苦しませることになってしまいます。このままが本人にとって一番楽なはずですよ」

呼び鈴が鳴った。娘のローラがすすり泣きをしながら、ドアを開けに行った。元妻のジョアンナ、横には白い衣をまとった司祭が立っていた。朦朧（もうろう）とした意識の中では、赤ちゃんを抱いた聖母姿のジョアンナが、ＣＧソフトのレイヤーのように現実と重なっていた。Ｈ博士には二人のジョアンナが見えるのだが、異なる次元の存在同士は、互いの姿が分からないようだった。

元妻のジョアンナは七十過ぎの老女となっていた。艶（つや）やかだった肌には皺が寄り、豊かな金髪も半分は白髪が交じっていた。ただ、柔らかなまなざしは、若かった頃とあまり変わらない。

「ごめんなさい！　いつまでも一緒にいようと、誓い合って結婚したのに……。介護がつらかったのは本当よ。でも、そのつらさを乗り越えてこそ夫婦だと言えるのに……。あのとき、私

を自由にするために、あえて冷淡な態度を取ったんでしょ。私はうすうす気づいていた。それなのに、それなのに……」

元妻のジョアンナはベッドの傍（かたわ）らで泣きくずれてしまった。小さな肩にすがるように、娘のローラもすすり泣きを始めた。連れてこられた司祭は、背後で呆然（ぼうぜん）と立ち尽くしていた。

Ｈ博士は愛する二人を抱きしめたくて、ベッドから立ち上がろうとした。すると、寝ている台が背後に動くような気がして、魂が引っ張られる形で、肉体から抜け出してしまった。気がつくと、あえぐ自分を見下ろす形で、元妻と娘の後ろに立っていた。ジョアンナはそんなことにも気づかぬ様子で、ハンカチで涙をぬぐうと、決然とした表情で司祭に向かって語りかけた。

「終油（しゅうゆ）の秘蹟（ひせき）をお授けください」

「それを博士もお望みだと」
「自分は無神論者だと公言していましたが、それは自身の理論の中に神の存在を見出し得なかっただけで、神さまに対する愛を失ったわけではないと思うんです。余命2年と宣告されながら、この日まで命を長らえられたのも、神さまの慈愛のおかげだと感じていたはずですわ」
　司祭は感じ入ったように大きくうなずくと、神への祈りを始め、次いで福音書の朗読を高らかに行った。その後、H博士の額と両手に聖なる油を塗っていった。肉体から抜け出した感覚がありながら、司祭の指で油が広げられるのを、H博士は肌で感じていた。元妻のジョアンナは儀式の妨げにならないように、小声でつぶやいていたが、博士は話をすべて聞き取ることができた。

「あなた、これが最後のチャンスなのよ。心の中で祈ってください。すべての罪が許されるように。神さまの愛に包まれているのを感じて！　最後の審判のときに復活して、あなたと再会できるように」
　すると、それまで黙り込んでいた聖母姿のジョアンナが、張り合うようなまなざしで、H博士の方に顔を向けた。
「神の許しを求めるのです。なぜためらっているの！　求めなければ、どんなことが起こるか分かっているわよね」と言うと、物言いたげにほほ笑むのだった。抱かれている赤ちゃんの方は、仏頂面のままそっぽを向いていた。
　H博士の心臓は停止した。部屋に女たちの嗚咽が響いた。医

師がうつむいて退出すると、司祭は祈りを捧げたあと、葬儀の話し合いをするために、娘のローラや元妻のジョアンナとともに、奥の部屋に移っていった。遺体はベッドの上に寝かされたままだった。肉体から抜け出したといっても、皮膚にはまだ感覚が残っているようだ。臓器提供を拒絶しておいたのは良かった。心臓が停止した直後に、目玉や腎臓や膵臓などを摘出するために、麻酔もなしにメスで切り裂かれたら、激痛を訴えることすらできないではないか。

ひとまずほっとしたものの、大変なことを思い出した。H博士は死ねばすべては消滅するものと考えていた。きれいさっぱりこの世とおさらばできるように、日本人みたいに火葬にしてほしいと、娘のローラに頼んでおいたのだ！　娘も元妻のジョ

アンナもキリスト教を信仰していたから、葬儀は教会の儀礼に基づくことに固執していたが、遺体を火葬にすることでは、博士の遺志を尊重することにしていた。

すでにH博士の遺体は、木で作られた棺桶に納められていた。蓋には小さな窓がついていて、そこから遺族が顔を覗けるようになっている。身動きできないほど狭く、顔の周りに置かれた花の香りがきつくて、くしゃみが出てしまいそうだった。土葬にされて遺体が少しずつ腐り、蛆虫に食われていくくらいなら、炎に焼かれて浄化される方がよほどましだと思っていたが、いざ棺桶に入れられてしまうと、火葬場の炉の中で髪に火がつき、皮膚が焼けただれていく過程が目に浮かんだ。恐怖の余り気絶してしまいそうになった。

魂が抜け出ているんだから、脱(ぬ)け殻(がら)が焼かれたって構わないと思う一方、遺体から完全に感覚が失われる前に、火炎の中に放り込まれたら、地獄の業火(ごうか)に焼かれる苦しみにもだえるのではないか。

何の事はなかった。気がつかぬうちに、火葬は終わっていた。遺体は高温で焼かれて骨も砕け、黒い炭の粉となって、小さな骨壺に納められていたのだ。

早春の寒い朝だった。葬列の車はいちばん前に、遺灰を胸に抱いた娘のローラと親族が乗り、次の車に元妻のジョアンナとその夫が乗っていた。以下の車には、国内外から駆けつけた研究者らが乗っていた。車列はゆっくりと、大学のキャンパスの中を進んでいき、博士の研究室があった建物の前でクラクション

を鳴らすと、併設されたチャペルに向かっていった。

H博士の葬儀が始まった。司祭が博士の偉業を讃(たた)えたのち、大学の学長、応用数学・理論物理学科の教授陣、友人や親交のあった芸能人らの挨拶(あいさつ)のあと、遺族代表として娘のローラが、会場に集まってくれた人々に感謝の言葉を述べた。

「父はにぎやかなことが大好きでした。合成音声を使って、私にもよく冗談を言いました。亡くなる一年ほど前から、私と母のことをよく間違えていました。それだけ母のことを愛していたんだと思います」

傍らにいたジョアンナはハンカチを目に当てていた。会場がしんみりとしたところで、司祭が前に出て、背後にいるパイプオルガン奏者に合図を送った。荘厳(そうごん)な響きに合わせて、讃美歌

の合唱が始まった。

諸人（もろびと）こぞりて　迎えまつれ
久しく待ちにし　主は来ませり
主は来ませり　主は　主は来ませり

自身の葬儀が行われている間、H博士はチャペルの中を漂っていた。親交のあった人々が一堂に会したことは、うれしい限りだったが、この自分がいることに誰も気づいてくれないのが、わびしくてならなかった。肉体はすでに燃えつき、壺に収められた遺灰は、名立たる科学者の傍らに埋葬されることになっていた。

葬儀に参列した人々は、H博士の魂が主イエス・キリストに伴（ともな）われ、天国に旅立つことを想像しているのだろう。手持ち

無沙汰になって、そのままステンドグラスを抜けて屋外に出ることができた。日が高くなってきたおかげで、外は暖かくなって、枯れ木のような枝から新芽が芽吹いていた。会場に入りきれなかった大学生や、近隣の人々がたむろしていた。雲はすっかり切れて、青い空には春の光がベールのように満ちていた。そよ風に乗って空をちょっと飛んでみたが、イエス・キリストの姿は見えなかった。主のお迎えはなかったのだ。やはり、火葬にしてしまったので、天国への門は閉ざされてしまったのか。そうと分かっていれば、人々を喜ばせるために、主の姿をホログラフィーで空中に映し出すように、頼んでおけばよかったのだ。

それにしても、大脳が失われてしまったのに、意識が存在し

続けるとは……。神経細胞がネットワークを形成して、思考や感情を生み出しているはずなのに。死後も意識があることなど、どう考えてもあり得ない。だとすると、本当はまだ死んでいないのかもしれない。葬式ごっこをやらかすとは、いたずらが過ぎるではないか！

　うちに帰っても、誰も自分がいることには気づいてくれないだろう。いったいどうしたものかと悩んでいると、もしやもしゃの白髪(しらが)に長く伸びた口髭(くちひげ)、額に深い皺が刻まれた学者が、こちらに近づいてきた。

「どこに行ったらいいか迷ってるなら、面白い所にご案内いたそう」

「私の姿が分かるんですね。だとしたら、あなたも三次元の存

在じゃない……。もしやアインシュタインの幽霊ですか」

　相手はそれに答えず、口許(くちもと)に薄笑いを浮かべている。Ｈ博士は胸がいっぱいになった。

「生前のあなたにお目にかかりたかったんですよ。一般相対性理論からすれば、ブラックホールの存在は予想できたのに、なぜ否定なさったのですか」

「すべての物理法則が破綻(はたん)するような特異点は、認めたくなかったからだよ」

「しかし、はくちょう座にはブラックホールがありますよ。私たちの銀河系の中心にも」

「そんなものは、生前には発見されていなかったんだから、わしのあずかり知らぬことだよ。同じ理由で、ビッグバンなるも

のも気に食わなかった。それ以前には時間も空間もないんだろ」

「ご存じでしょうが、遠ざかっていく星は赤く見えます。赤方（せきほう）偏移（へんい）というもので、宇宙は膨張しています。時間をさかのぼれば、ビッグバンが始まる一点にたどり着きます」

「年取った星が赤く見えてるだけかもしれんがね。まあ、そんなことはどうでもいい。学者にとって大切なのは、論文の数と名声だよ。わしがあんたを見込んだのは、宇宙のすべてを知ることで、自身が神に等しい存在になろうとした、その傲慢（ごうまん）さからなんだよ」

Ｈ博士は冷や汗をかく思いをした。気が重くなり、うつむき加減になると、老人のズボンが見えたが、靴を履（は）いていないことに気づいた。白い毛が生えた先には、二つに分かれた黒い蹄（ひづめ）

があるではないか。もしや、この老人、人間と山羊（やぎ）のキメラだったのか。

相手は人の心を読むのに長（た）けているようだった。にやにやしはじめると、急になれなれしい態度を示した。

「どこに行ったらいいか、途方に暮れていたんだろ。面白い物を見せてやろう。退屈してる奴には打って付けの見世物なんだ。煮えたぎる血の河に投げ込まれたり、樹木になって葉を鳥についばまれたり、腹を割（さ）かれて内臓を引き出されたり。すごい迫力なんだ。しかも、ゴーグルをかけて見る仮想現実みたいな、子供騙（だま）しじゃないんだよ。五感すべてで苦しみを体験できるんだから」

気が遠くなりそうになった。Ｈ博士は逃げるように、キャン

パスの端にある川辺に飛んでいった。そこでは元気だった頃の自分のように、ボード部の学生が、呼吸を合わせて競技用の艇を漕いでいた。水面に自分の姿を映そうとしたが、学生時代の自分も、老いさらばえた自分も見えなかった。死んでしまった者は、この世界には存在しないからだ。

　振り返ると、白くて長い口髭の男に追いつかれていた。行こうと思った所に瞬時に飛んでいけるとしたら、いくら逃げたって無駄なのだろう。

「余命2年だったところを、七十半ばまで生かしてやったのをお忘れのようですね。宇宙のすべてを説き明かす方程式、それを発見するまでは生かしてほしいと願っていたのを」

「私は真実を知りたかっただけなんだ。その執念で生き続けた

だけなんだ。神にも祈っていないし、ましてや、おまえなんかと契約などしていない！」

「大した度胸をしている。神も悪魔も否定しようというのだな！」

　H博士はいきり立った。こんなに雄弁になるのは、気管切開手術で声が出なくなって以来のことだ。

「ああ、地獄なんぞも、気の弱い人間が見る幻で、存在なんかしていないんだ」

「そう、存在はしていない。しかし、おまえも存在していないが、悲しみも苦しみも感じているわけだ」

「黙れ。とっとと失せろ！」

「手に負えん奴だな。天国ばかりか地獄まで受け付けないとは。

おまえなんぞ、大好きなブラックホールに飲み込まれて、存在した痕跡（こんせき）までも消えてしまうがいい！」
呪（のろ）いの言葉を浴びせると、白髪だらけの老人は、ヒンズー教のカーリー神のように、長い舌を口から出してあかんべえをした。

ふと気がつくと、H博士は宇宙空間を漂っていた。無数の星の中でゆっくり回転しているのは、地球が属する銀河系だった。今ははるか彼方（かなた）にあるアンドロメダ星雲と、四十億年後には衝突するのだと思うと、人間が生きられる時間がいかに短いかということを感じた。とはいえ、自分はもはや生きた存在ではない。地球に生まれる前も、こうして宇宙空間をさまよっていたのだろうか。

そうだ！　太陽系から二万六千光年離れた銀河系の中心には、質量が太陽の約四百万倍もあるブラックホールがある。そこへは幽霊となった自分なら、瞬時にたどり着けるはずだ。H博士は存在しない瞼（まぶた）を閉じて、ふたたび開いた。前方にはゆっくり回転しながら、上下からジェット噴流を放出しているさまが見えた。ブラックホールといっても、目に見えない光は発しているらしく、周辺の恒星から吸い寄せたガスのうち、弾き飛ばされた物が事象の地平線のありかを告げていた。

あそこを越えてしまったら、二度と元に戻ることはできない。肉体はスパゲッティのように引き伸ばされ、奈落（ならく）に向かって落ちていくはずだ。その様子を観察する者がいたら、スローモーションで落ちていくように見え、最後には止まってしまう。た

だそれは、光さえ脱出が困難だからであって、本人は瞬（またた）く間に特異点に落ちて、素粒子を含めすべての存在は一点に押しつぶされてしまう。

Ｈ博士は改めて死を意識した。すでに死んでしまっているわけだから、死を恐れる必要などあるだろうか。生前に立てたブラックホールの仮説を、しかと魂の目で確かめるのだ。大きく息を吸うつもりで心を静めると、銀河系の中心にある鈍く光る渦に向かって、飛び込み台からジャンプするように身を投げた。

目にも留まらぬ速さで、Ｈ博士の魂はブラックホールの中心に吸いこまれていく。物すごい重力で光も届かなくなり、周囲は薄暗くなってきた。やがてすべての物が凍りついて、全く動かなくなった。時間も停止したようだった。肉体がないので、

バラバラに引き裂かれることもなかった。情報がことごとく破壊されるかどうかが、気にかかっていたのだが、ブラックホールの中は意外にも静かだった。破壊された魂の一部が、上下から噴き出すジェットに吹き飛ばされると思っていたのだが。

静寂が無限に続いていった。死ぬというのは、果てしなく続く空虚に耐え続けることなのか。時間が進むという現象は、エントロピーが増大することだから、時間すら停止してしまうと、何も発生しないということなのだろう。

ブラックホールの謎を解きたいという意欲もなくなった。死後の世界の退屈さこそが、神の恩寵（おんちょう）を拒（こば）み続けた自分に与えられた懲罰なのだろう。意識と無意識の境界もなくなり、自分が思ったことと、目の前に見えることの区別も分からない。こ

こがブラックホールかどうかということも、どうでもよくなってしまったのだ。

眠りに落ちたかと思ったとき、どこかから聞いたことがある声が伝わってきた。人間の生の声ではなく、コンピューターが合成した音声だった。

「すべてを統一する究極の理論を発見すれば、我々は神の心を知ることになるのでしょう」

どうやらH博士が生前、母校の大学で行った講演の一節が、地球から送信されて銀河系の中心にあるブラックホールまで届いたらしかった。だとすると、自分が死亡してから、二万六千年の時間が流れたということか。たとえ宇宙物理学者として、歴史に名を残せていたとしても、人類自体はとっくに滅亡して

しまったのかもしれない。

忘れていた！　ブラックホールでさえ永遠の存在ではない。熱を放射して白い光を漏らし、最後には大爆発を起こして消えてしまうのだろう。独房に閉じこめられる苦しみも、いつかは終わるときが来るのだ。それが魂の消滅するときであるとしても。

いや、待てよ。ここがブラックホールの中心にある特異点なら、ワームホールを伝って、別の宇宙に逃げ出すこともできるのではないか。希望は最後まで失ってはいけない。そう思ったとき、彼方に光の点が現れた。見る見る近づいてくると同時に、教会の鐘の音（ね）が聞こえてきた。元妻のジョアンナの歌声も交じってるではないか。彼女は私を愛し続けてくれていた。おかげ

で自分のような者にも、救済の手が差し伸べられ、復活のときが訪れたのだろうか。

　Ｈ博士は死んでからはじめて、心の安らぎを感じた。今までの悪夢もようやく終わり、光に包まれつつジョアンナと再会することになるのだろう。体が不自由になって以来、一度も行ってこなかった十字を切る仕種をしようとした……。

　次の瞬間、ビッグバンが発生した。摂氏(せっし)億度以上の高温となり、超素粒子のクォークが飛び交(か)う中、新しい宇宙は光速をはるかに超えるスピードで拡大していった。燃えたぎる空間は、光と闇の交じった混沌(こんとん)であり、天地開闢(かいびゃく)の幕開けだった。それを目撃した者は誰もいなかった。〈了〉

あとがき

　長年闘病生活を送った宇宙物理学者は、死に際してどのような体験をしたのだろうか。それに対する空想を、小説の形にまとめてみようと思った。学者のモデルを詮索する人もいるだろうが、実在した人物とここに描かれた人物は関係がない。

　人間は死んだら、パソコンの電源を落としたように、意識も消滅して終わりというのが、現代人の多くの認識である。死後に天国に行くか地獄に落ちるかなど、案じる必要はない。問題は死んだら消滅すると信じ込んでいたのに、死後にも意識が続いている場合である。その当惑を描きたいと思ったのが、この作品を書いた動機である。

二〇二五年七月六日

高野敦志